# わたしの聖ジハード戦

女性が働くということ

連208載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

## ナイチンゲールとヴィクトリア女王

医療分野に疎い人でも、ナイチンゲールの名前くらいは聞いたことがあるだろう。

クリミア戦争のとき、数十人の看護師等を連れて従軍し、看護師の育成や病院の衛生環境の向上に力を入れ、その後の看護師教育に多大なる影響を及ぼした。

少し前まで、看護師を養成する学校・大学では、戴帽（たいぼう）式を行っていた。戴帽式は、学生が病院実習に赴く時期に、教員がひとりひとりにナースキャップをかぶせ、その後にナイチンゲール誓詞を朗読する一連の儀式。看護という仕事に誇りを持ち、責任の重さを自覚させることを目的に、キャンドルのみの光のもと、厳かな雰囲気の中で粛々と行われる。現在は、ナースキャップそのものが衛生上の理由でなくなったがために戴帽式自体を廃止する学校もあるが、看護教育の根底には常にナイチンゲール精神が息づいていることに変わりはない。

フローレンス・ナイチンゲールは、トスカーナのフィレンチェで生まれた。生誕の地フィレンチェの英語読みがフローレンスである。大変裕福な家庭に育ち、当時としては最先端の教育を施された、教養あふれる才女であった。慈善事業で貧しい人々と接するうちに、奉仕活動に関心を持ち看護師を目指したものの、当時の看護師は、病院で病人の世話をする召使という扱いであり、母や姉は看護師になることには大反対だったという。

実際に、ナイチンゲールが傷ついた兵士たちの

を担っていたようである。本人も、白衣の天使と呼ばれるのを嫌がり、またあまり人付き合いを好むほうではなかったらしい。

ナイチンゲールの功績として知られているのは、「統計」である。

戦死者や傷病者のデータを分析し、兵士の死亡原因のほとんどが戦闘によるものではなく、傷を負った後の病院の不衛生ゆえであることをグラフで実証した。これによって、のちに病院の衛生状態を改善するための予算獲得に成功する。

男社会の軍の中で、社会的地位の低かった看護師という職業を認めさせるのは並大抵のことではなかった。いくら知性のあるナイチンゲールであっても、有力な人物の後押しがなければ、今に伝わる偉業を果たすのは無理だっただろう。ナイチンゲールを擁護し、看護にあたったのは、2年だけ。しかも、イメージに反して、ランプを掲げて苦しむ兵士たちの夜回りをしたことはほとんどなく、もっぱら統計を取ったり、軍の幹部に対し看護師の地位向上のための提言をしたり、どちらかというと政治的役割

統計結果を政策に生かすことに積極的だったのが、当時のヴィクトリア女王である。

ヴィクトリア女王といえば、イギリス全盛期時代の女王として知られ、在位はなんと63年と7か月。その華麗かつドラマティックな人生は、たびたび映画化もされている。

片や看護師を専門職として確立したプロフェッショナル、片や大英帝国を象徴する歴史的女王。子だくさんの女王に比べ、ナイチンゲールは未婚を通した。これも看護の仕事に専念したかったから、といわれるが、実際は同性愛者だったとも伝えられる。

虚実入り乱れる彼女らの評伝はともかく、ふたりとも時代を大胆に切り開いた人物であることに変わりはない。両者の写真にみてとれる、強さと慈悲あふれるまなざしに、圧倒されるばかりである。

イラスト・伊藤栄章